

私は今、日本でとても豊かな環境で暮らしている。しかし、世界には一九六カ国あるが、そのうちのおよそ一五〇カ国以上もの国が発展途上国と呼ばれる国々だ。

私は以前、学校の道徳の時間で「ハゲワシと少女」という写真についての授業を受けた。この写真は、南アフリカ共和国の報道写真家であるケビン・カーターさんによって撮られたものだ。写真には、スーダンで餓死寸前のうずくまった少女をハゲワシが狙っている場面が捉えられている。私はこの写真を見て衝撃を受けた。少女の体がすごく弱っているのが平面の写真からでも伝わってくるからだ。食糧が無くて飢餓状態の人たちがたくさんいるのは知っていたが、実際にこのような状況の写真を見ると、何もできない自分がもどかしくなる。

発展途上国の多くは貧困や紛争といった問題を抱え、貧困による衛生事情の悪化が感染症の蔓延や環境汚染にもつながっている。また、貧困は教育や雇用の機会を奪い、社会不安を招くことから、紛争の原因にもなっている。

世界がグローバル化した現在、こうした問題は、世界規模での環境破壊や感染症の蔓延、紛争問題の深刻化といった形で世界全体を脅かしている。国際社会全体の平和と安定、発展のために発展途上国を支援することが国際協力だ。世界中の全ての人々がより良い未来を目指し、共通の課題に取り組むことが求められているのだと思う。

そこで、生活環境を改善するために行われているのが「ODA（政府開発援助）」という活動だ。「ODA」とは、発展途上国に資金を送って援助することである。特に、アフリカや中東アジア地域が多く、医療施設、薬や注射器、ダムや道路等、人の暮らしや経済発展に必要な分野に支援をしている。

今日は発展してきた日本だが、戦後の貧しい日本は、外国からの資金援助が無ければ立ち直ることはできなかつただろう。

私はこの作文を書くまで、日本の税金が自分の国だけでなく、外国でも使われていることを知らなかった。「経済協力費」という発展途上国への資金は国の歳出総額のおよそ〇・五%だが、その少しの税金でも、世界の誰かを救うことができるかもしれない。私は「消費税」しか税金を納めていないが、その税金が「ODA」の役に立っているのだと思うと、とても嬉しい気持ちになる。私たちのような中学生でも、税金を納めれば世界の幸せに少し近づける。

税金で明るい未来に変えることができ、世界を救うことができる。世界中が国と国を支え合いながら生きていくことで、世界が一つにつながるのだ。私は今の社会をより良いものにするため、大人になってもしっかりと税を納めていきたいと強く思う。いつか、税金の力で笑顔があふれる世界を実現したい。